様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 5 日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：２００５～２００８年
課題番号：１７３２０１１０
研究課題名（和文）　韓国出土文字瓦データベース構築のための予備研究
研究課題名（英文）　Preliminary research to construct database of character tile Excavated in South Korea

研究代表者
田中俊明（TANAKA　TOSHIAKI）
滋賀県立大学・人間文化学部・教授
研究者番号：５０１８３０６７

研究成果の概要：古代史料が極端に不足する韓国古代史を再構成する上で、出土文字資料の重要性は極めて高い。木簡・石碑も新たな発見がつづくが、ここでは文字瓦をとりあげ、歴史資料として使用に耐えうるかたちで集成・提示し、またそれを利用した研究をめざした。特に百済圏において、王都のみならず、地方山城からも刻印瓦が出土するが、それを中心に、可能な限りで網羅的に調査し、刻印の目的や瓦の製作時期を考察した。それ以外の文字瓦についても、現物調査を進め、個体に関する新知見を得るとともに、総体として文字瓦の資料化をはかった。ただし多くは報告書にもとづく検討であり、当初の課題であるデータベース構築のための予備的な研究を終えて、今後、実際調査しえたものとあわせ、データベースとしての作成・公開をめざしていきたい。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００５年度	3,800,000	0	3,800,000
２００６年度	3,400,000	0	3,400,000
２００７年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
２００８年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
年度			
総　計	14,400,000	2,160,000	16,560,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・東洋史
キーワード：韓国・文字瓦・刻印瓦・データベース・百済・新羅

１．研究開始当初の背景

文献史料の零細な韓国古代史の研究資料として、石碑などの金石文資料や木簡が注目されている。金石文資料については古くより集成されたもの（図版・釈文集）が多く刊行されており、木簡は『韓国の古代木簡』（国立昌原文化財研究所、2004 年）という大冊が刊行され、利用が容易になっている。ところが文字瓦については、文献史学の立場からは、それほど関心がもたれておらず、部分的に利用されることがあった程度である。しかし文字の数からいっても、広範囲に見られるという点でも、文字瓦の持つ意義はあらためて評価される必要がある。そのため、本研究開始の前年まで進めてきた科研費「韓国出土文字資料の総合的研究」による調査のうち、文字

瓦に限って、その集成をすることにした。
その時まで、韓国の国立博物館や大学博物館に所蔵されているものについて、実際に拓本採取・写真撮影を含めた調査をしてきた。しかし出土量が毎年着実に増えて膨大であり、すべてをこのようなかたちですすめることは無理であると判断された。そこで、そのような直接調査も進めつつ、すでに報告書が刊行されているものについて、報告書掲載の写真・拓本を基本的に利用して、スキャナーによってとりこみ集成をすることも加えることにした。直接調査は、報告書において、写真・拓本不掲載あるいは掲載していても不鮮明なものを中心にすすめることにした。

２．研究の目的

最終的には、韓国出土文字瓦データベースの構築を目的としているが、本研究は、そのための準備段階として位置づけている。韓国において、文字瓦の釈文集については、『韓国古代金石文資料集』（国史編纂委員会、1995年）のあとをうけて、準備中であると聞いているが、それは現地調査をふまえたものではなく、また写真資料を加えたものではないようである。もちろんそれでも、どのような資料があるのか概観する上では、これまでになく便利にはなるが、実際に歴史研究の場において、どこまで安心して資料として用いることができるかといえば、極めて不十分である。やはり、写真・拓本を並列し、みずから釈読の確かさ・不確かさを確認できるかたちでなければ、研究者にとって使用に耐えうるもの、とはいえない。ここで目指しているのは、写真・拓本・釈文を備えているものであり、また遺跡の性格について考察を加えたものを考えている。それは、これまでなかった文字瓦資料集であり、それのみあれば、歴史研究の資料として完結するものである。
そうしたデータベースを構築する上で、文字瓦の年代や、記された内容についての研究は、不可欠である。それについても、並行して進めることを目的としている。

３．研究の方法

多くのデータを集成する必要があるが、基本的には、すでに刊行されている発掘調査・地表調査報告書に掲載されているものの集成であり、その上で、不鮮明なものを実際に撮影・採拓をしてデータの修正・追加をしていく。
調査対象は、韓国の公共機関に所蔵する文字瓦であり、国立の博物館・文化財研究所、国立私立の大学博物館その他である。そこで、観察してメモをとり、拓本採取・写真撮影をする。写真は、われわれによる記録写真のほか、写真作家で、韓国各地の国立博物館での特別展などの際に遺物・遺跡写真を撮っている呉世允氏に依頼している。

４．研究成果

まず第一に、文字瓦に対する調査成果がある。次の通りである。

１７年度：９月に、全羅南道を中心に調査を進めた。木浦大学校博物館・東新大学校博物館・湖南文化財研究院・順天大学校博物館・松広寺聖宝博物館・双溪寺などである。これらは、発掘調査によって出土した文字瓦を中心にしている。双溪寺は、大雄殿の解体修理を実施中で、松広寺の末寺であるため、聖宝博物館館長の古鏡師に同行してもらい、屋瓦を実見したものである。

１８年度：８月に忠清南北道を、３月に釜山・全羅道・ソウル地域の調査を進めた。８月は、国立清州博物館（特に雲泉洞寺址・上党山城）・忠北大学校中原文化研究所（上党山城）・清州大学校博物館（雲泉洞寺址）・中原文化財研究院（父母山城）・忠清南道歴史文化院（栢嶺山城）・順天大学校博物館（馬老山城）などである。中原文化財研究院では、

好意によって、清州父母山城の未報告の文字瓦も調査することができた。３月には、所在状況と資料調査を実施した。

１９年度：９月に忠清北道清州・大田市・江原道春川市において調査を行った。大田では大田市郷土史料館、清州では清州百済遺物展示館、春川では翰林大学校博物館・江原大学校博物館・国立春川博物館である。それ以外に、６月・１２月・２～３月に文字瓦出土遺蹟の調査、および調査予定の博物館等との打合せを行った。

２０年度：８月と９月とに全羅北道任実郡・全州市・益山市、忠清南道扶餘郡において調査を行った。任実では全北文化財研究院、全州では国立全州博物館、益山では道立弥勒寺址遺物展示館、扶餘では国立扶餘文化財研究所・国立扶餘博物館である。昨年度までと同様、発掘調査によって出土した文字瓦を中心にして、その拓本採択・写真撮影・観察を実施した。それ以外に、６月に文字瓦出土遺蹟の調査、および調査予定の博物館等との打合せを行った。

研究目的からすれば、以上の調査成果が第一であるが、それと並行して、自らの研究も進めた。まず、刻印瓦について、韓国の研究者との討議の機会を得て、問題意識・認識を共有することを試みた。１９年１月には、韓国の刻印瓦の研究者（李ダウン氏・沈相六氏）を招聘して、研究会を開いた。２０年１１月には、韓国から刻印瓦の研究者（盧基煥氏）や、刻印瓦出土遺跡の調査者（車勇杰氏・姜元鍾氏・姜鍾元氏）を招聘しての研究会を開いた。その成果は、調査データとあわせて、刊行を予定している。

さらに個別の研究成果としては、例えば、田中が、以前から進めている京畿道河南市船洞の文字瓦について、９世紀の海上交易を推進した張保皐らと関わりがあるというよりは、新羅末の弓裔勢力のなかで、特に南方へ水軍を送って経略した王建との関わりを重視すべきであると考えるようになった（その原稿「張保皐以後のアジア海域」「９世紀末・１０世紀初における新羅西南地域の実態―王建の勢力基盤としての羅州勢力―」は、韓国の機関に２年前に原稿を送ったが、まだ刊行されていない）。また益山・王宮里遺跡出土の「王宮寺」銘の文字瓦をとりあげ、王宮里遺跡の性格を再考し、公州・扶餘出土の「大通」刻印瓦をとりあげ、梁との関係について言及した。亀田修一は、これまでの瓦の研究を総合した著書をまとめ、高正龍・吉井秀夫は、瓦を対象とする論考を発表している。高は特に刻印瓦について、その意味の解釈を進め、年代と工人名とをあわせて刻印したものととらえ、６４０年前後のものと考えた。また吉井は、光州武珍古城出土の文字瓦を検討し、９・１０世紀における瓦製作工人の存在と、その供給先は武珍古城に限らず光州市内の別の建物も対象であったことを明らかにしている。

なお調査作業およびデータベース化の意図について、韓国では期待されるむきが大きい。これまでそうした集成がなく、また研究資料に活かせることが十分に予測できるからである。ただしそれは、本研究ではなく、これらをもとにしたデータベースに対しての期待である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 17 件）

①亀田修一、朝鮮半島における造瓦技術の変遷、『古代東アジア交流の総合的研究』、pp. 122 -156、2009、査読無
②田中俊明、百濟の對梁外交、『忠清学と忠清文化』7 巻、忠清南道歴史文化研究院、

pp. 83-132、2008、査読無
③田中俊明、朝鮮三国王都の変遷、『古代東アジア交流の総合的研究』、国際日本文化研究センター、pp. 417-436、2008、査読無
④吉井秀夫、武珍古城出土文字瓦の再検討、『吾々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論集刊行会、pp. 583-599、2008、査読無
⑤亀田修一、日韓古代山城の比較、古代武器研究９号、pp. 72-81、2008、査読無
⑥高正龍、百済刻印瓦覚書、朝鮮古代研究８号、pp. 63-76、2007、査読無
⑦田中俊明、高句麗平壌都城と王宮城、『馬韓・百済文化』17 輯、円光大学校馬韓・百済文化研究所、pp. 59-82、2007、査読無
⑧田中俊明、安祥寺開祖恵運の渡海、上原真人編『皇太后の山寺』柳原出版、pp. 156-183、2007
⑨高正龍、統一新羅施釉瓦?考―施釉敷?の編年と性格―、『有光教一先生白寿記念論叢』財団法人高麗美術館、pp. 303-318、2006、査読無
⑩田中俊明、百済武寧王の登場と文周王系、『有光教一先生白寿記念論叢』高麗美術館研究所、pp. 155-171、2006、査読無
⑪吉井秀夫、釜山考古会と博物館建設運動、『喜谷美宣先生古稀記念論集』喜谷美宣先生古稀記念論集刊行会、pp. 675-684、2006、査読無
⑫田中俊明、新羅王京に対する見方、『建築歴史研究』15 巻4 号、韓国建築歴史学会、pp. 161-172、2006、査読無
⑬田中俊明、朝鮮三国の都城と中国、『都市と環境の歴史学第２集』、pp. 427-448、2006、査読無
⑭田中俊明、高句麗寺院の調査と現状、『第９回天台国際学術大会』大韓仏教天台宗総務院・天台仏教文化研究院、pp. 57-87、2006、査読無
⑮吉井秀夫、朝鮮半島西南部における古代国家形成過程の諸問題、『国家形成の比較研究』学生社、pp. 120-138、2005、査読無
⑯高正龍、新羅顎部施文瓦の製作技法―統一新羅瓦の編年にむけて―、『ＭＵＳＥＵＭ 東京国立博物館研究誌』、pp. 47-63、2005、査読無
⑰高正龍、朝鮮半島北部の滴水瓦―平壌普通門・大同門、義州統軍停所用瓦の検討―、『立命館大学考古学論集』立命館大学考古学論集刊行会、pp. 367-386、2005、査読無

〔学会発表〕（計２件）
①田中俊明、「５～６世紀南海岸地域の伽耶・百済・倭」、韓国上古史学会、2008 年11 月14 日、韓国・順天大学校
②田中俊明、「新羅王京に対する見方」、韓国建築歴史学会、2006 年10 月21 日、韓国・ソウル大学校

〔図書〕（計２件）
①田中俊明『古代の日本と加耶』山川出版社、106p、2009
②亀田修一『古代日韓瓦の研究』吉川弘文館、502p、2006

６．研究組織

(1)研究代表者
田中 俊明
滋賀県立大学・人間文化学部・教授
研究者番号：５０１８３０６７

(2)研究分担者
亀田 修一
岡山理科大学・総合情報学部・教授
研究者番号：１０１４０４８５

高 正龍
立命館大学・文学部・教授
研究者番号：４０３３０００５

吉井 秀夫
京都大学大学院・文学研究科・准教授
研究者番号：９０２５２４１０

(3)連携研究者

井上 直樹
京都府立大学・文学部・准教授
研究者番号：８０３８１９２９

東 潮
徳島大学・総合科学部・教授
研究者番号：７０２４３６７３